

宇和島湾の出口にあった海水浴場「赤松遊園地」。夏になれば大人も子供もここに通い、こぞって謳歌した昔日のこと。

バスでも行けたが道幅が狭く、窓から下を見ると海にはみ出して走っているよう。もっぱら夏の間定期船を使った。煙突の煙や船特有の匂いに高揚し、潮風を受けながら穏やかな海をゆっくり進んだ。

間もなく見えてくるこんもりとした小さな森。麓には竜宮城をイメージした建物がある。そこで船を下り、胸躍らせアーチをくぐればもう別天地。

ブランコや飛び込み板でダイブするもの。裏手のわずかな砂浜ではしゃぐ幼児たち。海水を引いた池に泳ぐ海亀や魚にキラキラ目を光らせる子供。灼熱の太陽

をシリシリ浴びながら食堂のかき氷に並ぶもの。施設を利用しながらも自らの工夫で自然の中に身を投じ、爛熟の夏に弾けていた。

当世では、テーマパークなど過剰な人工施設の刺激によって、遊ばされている感じがしてならないが……。先端には、高さ5、6層もある「覗き岩」が異体を

真夏の夢

見せている。この大岩を上まで登り、怖さを押し殺して海に飛び込み、ほど先の九島まで泳ぐ。勇猛さを示し、子供からの脱皮をはかる儀式のようなものであった。ある同級生などは、ドボンと入ったものの水中で岩に触れ、血に染まって浮き上がってきたりした。しかし、そんなにぎわい

も長くは続かず、僕が中学生になったころには、養殖や廃水の汚染によって泳げない海になっていった。(今はだいぶ改善されている)

以来遠ざかっていたが、ある時期、廃虚となった様子に惹かれるようになり、遠来の客があると必ず連れ



て行く場所に。もの悲しくもそこから滲み出る美しさやおもしろみを見せたいと。時の流れや、祭りの後に漂う寂寥感を嗅ぎ取ってほしいという思いもあった。去年の夏、数年ぶりに一人で行ってみた。すると見るも無残、あの魅惑的な廃

虚の美は失われていたのだ。脱衣場やシャワールームは崩れ、藤棚は今にも落ちそう。哀れをそそるばかりの残骸に変わっていた。

岩の裂け目から突き出るウバメガシのうねる枝までが殺伐として見える。目を覆うばかりの惨状に滅入ってしまう、足早に出口に向かう。

そこにはヨットが艇所在なぎげに係留され、ウミヒヨドリだけがせわしなく遊び回っている。朽ちゆくものを頭から振り払うように、遠く市街の方に目を向ける。と、借景となる鬼ヶ城連山に差す夕陽。くきりとした光の中に真夏の夢の残像が映る。

誰もが心の底からくったくなく笑っていた、あの竜宮はどこに行ったのか。

(吉田 淳治・画家)